

# 信州伊奈郡鄉村記 卷之四

○萩原本云  
伊賀良庄  
西は木曾峠迄中道  
は久米之運川まで  
下道は下瀬まで天  
龍川を限とす是を  
下郷と云

伊賀良庄

飯田御城下之南松川の上道は駒場領迄、東木曾峠迄中道は久米の運川迄、下

東鑑にも伊賀良之庄専勝寺領に被附といふ、土俗にいふ伊賀良古高八千貫と云、今三拾三ヶ村に分

一山村中 古高千三百拾三石八斗六升三合

此物成六百貳石五斗五升三合 免四ツ五分八厘

當時之高貳千五拾五石九斗六升七合

内枝村

柿木島新田別庄屋有高七拾貳石七斗七升三合

須志角新田 高四拾五石四斗貳升貳合

中西新田 高廿六石六升

右納米貳千三百五拾壹俵貳斗六合九勺

山村上平、中平貳ヶ所に庄屋有 古書に山村之内中 島拾五貫文

「信州伊奈郡鄉村記 卷之四」  
(信濃教育會下伊那部會、大正4年、信濃史学会)

○萩原本今村本  
藤後本云  
古城跡古來長熊と  
書す元祿十二卯年  
信州鄉村御改之時  
公儀御帳面に名古  
(イ子)と有之由に  
而改然共寛文十二  
年御引渡目録にも  
長熊と有既に當村  
舊跡運松寺之山号  
長熊山也一説に島  
田邑松尾之城と云  
人有云々

一北方中 古高四百九拾七石壹升九合

此物成貳百四拾石七斗三升六合 免四ツ八分四厘

古書に山村之内北方入野三拾三貫文清水曾右衛門領と有 天正年中山口入櫻山に小笠原新彌居す、

高六拾貫領すといふ

當高九百七拾貳石貳斗壹升九合

納米九百五拾貳俵貳升貳合四勺

一名子熊中 古高四百七拾六石九斗六合六勺 平均免四ツ四分七厘

當高八百廿五石八斗七升六合

納高七百七拾五俵八斗七合四勺

古城跡一説に、島田村松尾城と云人あれ共松尾城跡古城村と云て儘に名子熊之内也。右之古城松尾城と号す。甲斐源氏武田の分流小笠原伊奈三郎光康之孫 小笠原下總守一書に彈正イ從四品定基公、建武年中より居城代々住之伊賀良八千貫不殘領すといへり。青表紙に松尾領壹万貳千四百四拾壹石九斗四升六合三勺と有。定基子左衛門尉貞忠 其子從四位彈正少弼昭夕、其子從四位佐衛門佐兼、下總守信貴法名龍門寺殿、元龜年中甲州の武田晴信公へ屬し秋山伯耆守相備へに被附、其子信濃守從四品清長 其子從四品松尾掃部太夫信嶺以在名、家号とす。天正十年二月織田信忠公當國御討入下條口を破



○川手本註記  
所替天正十八年此  
小笠原子孫越前勝  
山藩主也

る。掃部太夫防戦叶はず家來之居城田中イ城へ退き降参す。本領安堵。其後武州本庄へ所替。御國繪  
圖には松尾領壹万三千石と見へたり。百騎之大將也。

○萩原本、北原本により四行補記

中古高四百七拾六石九斗六合六勺

此物成貳百拾三石貳斗九合 免四ツ四分六厘

當高八百貳拾五石八斗七升六合

納米七百七拾五俵八升七合九勺

一 色 中 古高百五拾九石八斗九升六合

此物成七拾壹石六升八合 ならし免四ツ四分五厘

當高貳百三拾七石六斗七升八合

納米貳百壹俵貳斗九升壹合

一 島 田 中 古高貳千拾三石八斗四升八合

此物成九百七拾四石四斗五升壹合 免四ツ八分四厘

古來島田郷より毛賀村を分る。島田三ヶ村に分る。

古高之内四拾九石四斗三升三合貳勺 御引渡し不足

○萩原本云  
右之内八幡高千石  
餘 新井村右同斷  
明村 高千貳百石  
明清水共に

當高貳千六百廿七石貳斗七升九合三勺

納米三千貳百八拾六俵四升四合壹勺 小物成榑木共に

右之内 千 俵 八 幡 千俵餘 新井

千貳百俵餘 明、清水共に

一 毛 賀 上 古高五百貳拾石七斗四升九合四勺

此物成貳百壹石四升三合 免三ツ八分六厘

古來島田郷より別村に分る。脇坂様御領知之節は立花村といふ。公儀御帳面に毛賀と有。

天和三年亥四月新、繩檢地入

當改高六百九拾七石七斗六升 外につかみ免被下

納米八百四拾貳俵三斗八升四合 小物成榑木共に

一 駄 科 下 古高五百五拾九石八斗八升貳勺

此物成貳百三石三合 ならし免三ツ七分貳厘

外に貳百貳拾四石三斗八合六勺 長野原新田 青表紙には六百九拾石八斗八升貳合此石高は長

野原も此時迄一ツ也

寛文十二年以來別村に出す。公儀面は駄科の内也



鈴岡之古城跡有往昔小笠原下總守一族居城也、又土佐守屋敷とも云傳ふ、續而龍門寺曲輪といふ隱居地あり、中比、改高千壹石四斗三升九合、正徳三己年三月新檢地入、日數廿日掛り改る

當高千九拾三石三斗四升七合

納米千貳百六拾七俵貳斗壹升壹合 小物成樽木、米共に

此外百六拾四俵古來之例有之仍願つかみ免被下

右御檢地之節、御役人惣奉行館野太左衛門殿、郡奉行杉本所左衛門殿、黒須卯右衛門殿、御代官市瀬元右衛門殿、御賄役惣支配宮崎龜右衛門殿、算方松村清右衛門殿、下目附加藤四郎右衛門殿、御手代谷田部權左衛門殿、此外御賄ひ方下役、人竿取衆五人參られ改る。

一長野原下 古高貳百廿四石三斗八升六合

當高二百五拾九石三斗四升三合

納米貳百四俵壹斗四合

駄科之内新田村也、寛文十二年以來別村に分る、元祿十二卯年御國繪圖御改之時水野隼人正様迄別村に書上る、然れ共其後御朱印には村數は前々通り、御副目録には別新田高に入、

長野原之外、上殿岡、下殿岡も青表紙には駄科村之内に入る、

一下殿岡下 古高三百七拾石五斗五合 内五石貳斗五升七合新田

此物成六拾壹石九斗五升貳合 免二ツ貳厘  
當高四百四拾七石六斗五升八合  
納米三百八拾俵五斗壹合六勺  
一上殿岡下 古高百拾八石六斗三升五合六勺

此物成米四拾三石三斗貳合 ならし免三ツ六分五厘  
當高貳百一拾壹石四斗四升壹合七勺  
納米百九拾俵壹斗六升七合壹勺

一桐 林下 古高六百四拾石六斗八升三合貳勺  
此物成百八拾四石四斗四升八合 免二ツ八分八厘

當高八百六拾五石三斗六升八合壹勺  
納米九百三拾七俵貳斗四升八合九勺

外に九拾俵つかみ免被下

一時 候下 古高百六拾石壹斗五升九合五勺 青表紙古高百三拾三石壹斗五升九合九勺

此物成五拾九石五斗六升八合 免三ツ七分貳厘  
當高四百三拾六石八升七合六勺



納米三百五拾四俵貳升七合七勺 イ米

一大瀬木下 古高五百九拾貳石九升八合七勺 イ一斗九升云々

此物成貳百八拾九石五斗八升 免四ツ八分九厘

○今村本及後藤本により左の三行を補ふ

當高千五拾壹石壹斗八升壹合五勺

納米千四拾七俵八升五合九勺 イ八升五合

外に米三拾八俵三斗六升七合五勺 イ八 つかみ免被下

長慶年中地士小堀清光小笠原秀政に従ふと云

内羽生野村三百廿九石九斗八升七合 イ八合七勺 古高也

一三日市場下 古高四百三拾六石壹斗三升 イ三合

此物成百六拾貳石八斗六升八合 免三ツ三分五厘 イ七イ三

當高千五拾壹石壹斗八升壹合五勺 イ七百拾石八斗九升八合(イ一合)

納米千四拾七俵八升五合九勺 イ四百七拾六俵貳斗三升壹合六勺(イ四百七俵貳斗三升壹合六勺)

外米三拾八俵三斗六升七合餘 つかみ免被下

天和三亥四月新檢入

一中 村中 古高九百六拾四石九斗六升五合 イ四 内長清寺領三石有

此物成三百三拾七石三斗壹升八合 免三ツ五分壹厘

當高七百拾石八斗九升八合

納米四百七拾六俵貳斗三升壹合六勺 イ二百四拾八石

新改高千貳百四拾八石 イ此内四之方

右村之内 貳百九拾壹石九斗六升八合 イ一石

古 田 壹石八斗七升貳合

古 新 田 貳石六升八合

小 物 成 新改高四百拾六石有

右西之方寛文十二年以來 再飯田領

東方古高六百六拾九石九斗九升七合 内三百石餘、天和年中竹佐領イと成殘る三百石餘松平攝津守様御領知と成、殘り三百石は飯田領也、新改高八百三拾貳石有、

一上川路上 古高貳百三拾三石貳斗四升 イ六拾八 外に三拾五石開善寺領

此物成百三拾壹石壹斗七升五合 免五ツ六分貳厘

當高三百三拾七石九斗六升九合 イ九勺



○藤原本云  
竹佐領 下川路  
竹佐領 下

納米三百四拾三俵壹斗九升九合

當村之儀伊豆木、下條筋へ往還殊に諸方人馬出候に付賣買物小賣見世棚奉願、享保三年亥三月御書出  
被下御免也。

右は下郷之内十六ヶ村、古來の飯田領也。

一下川路上 古高七百三拾六石六斗七升八合 イ竹佐御領

此物成三百五拾五石壹斗六升五合 免五ツ壹厘

一下 瀬上 イ高 古高百四拾九石貳升七合

此物成五拾貳石五斗貳升九合 免三ツ五分三厘 イ五イハ

初飯田領、寛文十二子年の御料所に成、當村大泉寺之境内を御代官陣屋とし玉う。天和三年の竹佐領  
に被附。

一久米上 青表紙に六百八石三斗貳升四合八勺 イ久米村光明寺村共に

内九拾壹石壹斗五升六合八勺 イ光明寺村

イ高 當高六百五石三斗貳升四合 内三百石光明寺イ村

此物成貳百五拾八石六斗六升七合 イ九 免四ツ貳分七厘 イ五ツ七分壹厘

古來小城有て小笠原氏住之と云、其後飯田領寛文十二子年の御料所、天和年中の竹佐領。

一山本下 高九百貳拾石九斗壹升貳合五勺

内 東方古高三百三石 前方飯田領 今竹佐領

此物成貳百七拾壹石三斗九升 イハ 免五ツ五分壹厘

陣屋建西方高六百拾七石九斗壹升貳合 イ東 イ二合五勺 家數百五十軒餘、

山本邑古之地士 林 關 島 岡 庭

イ軒 此三家に而領す。元和年中以來近藤信濃守高政公之御一子近藤織部重堯公高五千石に而領之、立石  
村に陣屋を構へられける、御父高政公は壹万石領し玉ひけるが、元和四年六月廿二日於江戸逝去  
御年三十一歳、妾腹之御男子百介不達三上聞、御名跡可及斷絶之所一家中仍御願二百助殿被召出名跡  
御立五千石被下之。

元和四年の 近藤織部藤原重堯公 イ幼名百助 後に隱居道休と号す

貞享二年丑四月十三日行年五拾五才に而卒す イ七

同 織部藤原重信公 雅名百助中比主税

イ延寶 九西六月廿六日家督

イ父 重堯領知イ五千石之内四千三百石重信家督、下條、粒良脇七百石弟平八、郎重由へ分知、元祿六年西  
イ二 十一月三日逝去辰之介に家督給はる、家督以後宮内後に、



○萩原本云  
從五位下藤原重治  
初辰之助  
後宮内後政總

○全本云  
近藤宮内天文三午  
年山本陣屋を拂立  
石に又陣屋を立

○川手本註記  
政總の子  
宮内政共

開漢路守政方  
開漢路守政明  
開信濃守政賢  
開主税政養  
開利三耶政敏  
近藤政寛

四千三百石也  
近藤淡路守從五位下藤原重治公

後に政總と号す、當代に立石陣屋を拂而山本へ陣屋を建、享保九辰年御小姓組御番組御番頭に被仰付、  
叙從五位下任諸太夫、同十四年酉正月病死。

同年家督

近藤宮内藤原重清公 初辰之助

右山本領 山本之内西之方

立石 小川之内 大草之内 上穂之内 下條に 大久保 大島

恩澤 大平 栗矢野 鴨目 梅田 上栗原 島原

河内 小松原 粒良脇 合原 北俣

合拾八ヶ村 古高五千石也

一北伊豆木上 青表紙には伊豆木惣高千三百三拾石七升南北壹ヶ村也後に貳ヶ村に分る。

應永年中伊豆木美作守領之といふ、松尾掃部太夫信嶺之實子六根不具にして家督を不繼、慶長の初家  
康公へ被召出、同六年此所に而千石被下、  
信嶺領之跡は酒井左衛門尉忠次へ被下繼家督左衛門尉信之と号す

小笠原彈正長臣 法名意藏齋

同 孫左衛門長泰 法名源退

知久伊左衛門弟孫左衛門養子

同 鞠負源長朝 法名三樂

伊豆保十年家督

同 彈正源長貞 御内記

同 鞠負長陣 (後藤本享保十年家督)

同 兵庫長照

○小笠原本記  
長著 長計  
長厚 長裕  
長隆  
小笠原第一郎

一南伊豆木上 高三百三拾石七升

初飯田領、寛文十二年御料所 天和年中竹佐領

一竹 佐下 古高六百石三斗貳升四合貳勺

此物成貳百三拾四石七斗八升五合 免三ツ九分壹厘

初飯田領、寛文年中御料所、天和元年酉八月三日、將軍綱吉公尾張大納言光友公へ御成之砌り、光友公

之御次男攝津守義行公を召出され新知三万石被下旨仰出さる。義行公御母公は忝くも三代將軍家光

公之姫君千代姫君イ之御腹也。出雲守義昌公は最初に出生有しか共妾腹故攝津守殿之弟に成玉ふ、當

村に陣屋相建られ、

松平攝津守從四位左近衛少將源義行公

信州伊那郡、高井、水内郡に而領之、其後高井、水内郡は差上られ濃州本巢郡高須の城に御在城、當陣  
屋には御郡代を被差置。

天和年中

岡島義右衛門



○北原本及太田本には  
「天和年中より」より  
「大島之内ニケ村古町、新井」迄を  
清内路の條下「飯田御城王より代々以家臣令守之」の前に加へたり

元祿年中々

平澤唯右衛門

享保年中々 松平攝津守從四品右近衛少將義孝公

實は尾張大納言綱誠公二男也、初は日向守也、義行公之養子と成玉ふ、享保十七子五月御病死御無一子、義行公之御舍弟を養子とし玉ふ。

享保十一年々

御郡代 佐治新左衛門

享保十七子年々 松平但馬守 實は義行公之御舍弟也。

同 廿年卯年々

御奉行 荒木治郎右衛門

同 斷 鈴木三郎兵衛

右竹佐領

御陣屋近所に七ヶ村

竹 佐 山本之内 中村之内 久 米 南伊豆木 下川路 下 瀬

下條に廿八ヶ村

月 原 山田河内 小 田 神子谷 中屋御供 大森平石 大平大那木

深 見 千 木 小 野 平 久 和知野 早稻田 井 戸

新木田 鷺 巢 淺 野 門 原 小中尾 田 上 古 城

粟 野 雲雀澤 新 井 鎮西野 入 野 親 田 新 野

川東に八ヶ村

知久平 同山分 柏 原 虎 岩 伊久間 壬生澤

福 島 供 野

大島之内ニヶ村

古 町 新 井 善光寺平之内也

新 野 眞 山 高 遠 更 科 菅

戸 狩 上 條 夜間瀬 浮 邑 横 倉 越 村 新 俣

篠 井 大 熊 井 上

水内郡之内に十一ヶ村 川中島之内也

千 田 栗 田 荒 木 中御所 堂 西 條 上駒澤

下駒澤 金 箱 留 行 問御所

此廿八ヶ村高須領と御引替也

合七拾四ヶ村 高三万石也



○北原本云

一清内路 其古へ  
信州普く甲州武田  
晴信入道信玄公の  
武威に誇り國人從  
之然共伊那郡の士  
は不屬之信玄公怒  
りに不忍所に權こ  
もる凶徒尋求て討  
之飯田近邊の山中  
を塞ぎ和合波合市  
ノ瀬清内路此四ヶ  
所に關を居へ山谷  
嚴敷政探り終に伊  
那郡甲州方尋求て  
討之飯田近邊の山  
中を閉和合關山波  
合市ノ瀬に關を居  
伊奈郡甲州方の御  
手に入相續きて四  
ヶ所共に關所と成  
る關山の關所と云  
は上清内路の内木  
曾峠の間に有り向  
後  
元和年中より  
岡崎儀右衛門  
元祿年中より  
平澤唯左衛門  
云々

一清内路 古書に清(イ青)内  
路上下貳ヶ村あり 御關所

其古信州普く甲州武田晴信公之武威になびき國人從之、然れ共伊那郡之士は不屬之、晴信入道信玄公  
是を怒り所々に楯籠るを尋ね永めて討之、飯田近邊の山中(イ塞ぎ)和合、關山、波合、市瀬、(イ清内路)此四  
ヶ所に關を居山谷悉く切取終に伊奈郡甲州方之御手に入、夫より相つゝひて(イ四ヶ所共に關所に成)關  
山之關所と云は上清内路之入木曾峠之間に有、而て後今の清内路に引移せし也、飯田御城主が代々以  
家臣令守之、今は堀若狹守菅原(イ細氏)親庸公御預り、此村山内故に(イ古來地高是なし)鍋蓋を作り飯田へ御  
年貢に納め來る、元和元年御料所に成、千村公へ御預け、箕瀬御役所を御自分領美濃久々里之御用向  
取次ぎ相勤め、阿良町へ御役所を引候ても前々之通り勤來る、然るに延寶五年己八月新檢地入御役組  
(イ人足相務む)  
(イ當ても同斷に)  
(イ相役)

三州御代官鈴木八郎右衛門殿御立會(イに而)御改、  
下高六拾四石三斗三合(イ升)

此反別七町壹反七步

イ内是より代々御年貢御樽木成にて納之、  
(イになし)

中 田 五畝十八步 イ石森  
盛壹石三斗代

此分米七斗貳升八合 免壹ツ

下 田 壹反七畝拾四步 イ四  
イ四步  
イ石森  
盛壹石壹斗代

此分米壹石九斗貳升貳合 免壹ツ

下々田 九畝貳拾五步 九斗代

此分米八斗八升五合 免九分

畠 六町六反八畝拾步

此分米六拾石七斗六升八合

猶 内

上畑屋敷は 十三代 中畑は 十一代

下畑は 九斗代 下々畑は 八斗代

山畑は 三斗代

右御代官慶長廿年々尾州御與力

千村平右衛門良重公 同 重長公

同 基重公 同 仲興公

同 仲成公 同 重朝公

一關駒場

○北原本云  
猶内  
上畑並屋敷地は  
十二代  
中畑は十一代  
右代官尾州云々



其始山本村保田下之住士林理右衛門子林丹波守駒場を押領し甲州武田方へ屬す、在名を以て家号とし代々住之、駒場丹後一騎合と号して三騎を召連るゝ、于爰宮崎筑後守藤原忠政といふ人元來座光寺原宮崎の地士宮崎重太夫子也。家康公へ被召出昵近す、女子おせん姫市岡喜左衛門妻と成、<sup>イ不順</sup>其後甲州武田勝頼方へ母子ともに人質に被捕、然れ共筑後守喜左衛門も甲州方へ降らず、おせん姫も不悲之爲忠義露命をおします終に敵之爲に被誅、家康公御威有兩人共に御心安く召仕はれ、おせん菩提を被令訪、筑後守には駒場丹後沒收之高千石餘給り慶長六年々住之、此子四人へ分知、其外伊那郡中御領分殘らず御預け三州迄支配之伊奈四代官といふは筑後守忠政の子息達之事也。

一駒場町上 古高五百三拾六石餘

青表紙之高四百廿八石七斗六升三合貳勺

内

一駒場上町 高貳百三拾五石

筑後守三男

宮崎太郎左衛門

初善介(イ善之助)

箕輪領、南山領、合貳千貳百石餘御預り

同 善 助

後太郎左衛門(本になし)

天和二戊七月家督

同 三郎兵衛

○秋原本及北原本云

天和二年戊七月十二日家督弟彌五郎は別に被召出御目見へ貞享二丑年依不行跡三郎兵衛沒收取同善助後に改太郎左衛門同三郎兵衛云々

○後藤本云

松平若狹守御預り地差引せし故也と云

○北原本及秋原本云

此騷動は三左衛門世事勅方疎略にて手代任に御領地差引せし故也

○北原本云

古高二百六十五石 市岡和泉守娘八郎右衛門妻 同利右衛門入道行陰

弟彌五兵衛は別に被召出、貞享二丑年依不行跡三郎兵衛沒收、

右上町分外高枝村中野に三拾石有、町中之内八軒屋敷は宮崎氏之女春芳院殿御化粧料、此御子、澤甚

左衛門御領知澤氏御自分料貳百五拾石なり、<sup>イ以下なし</sup>八軒屋敷は古へ林惣市住之と也、澤甚左衛門弟九郎左

衛門家督甲府在番貳百騎之内也、

一駒場下町 古高三百石

番場に陣屋有

筑後守四男宮崎藤右衛門入道淨安へ分知、藤右衛門二男同三左衛門藤原道次、三州武節郷貳拾八ヶ

村、名倉郷廿四ヶ村、津具降草七ヶ村、合て五拾九ヶ村御預り、延寶年中右郷中之百姓騷動之儀有之江

戸表へ越訴<sup>イしける所</sup>に道次仍短慮、是を不忍於三州切腹、依之沒收、嫡子藤右衛門は豊前小倉之城主小

笠原右近將監殿へ御預け、二男小三郎、三男助六兩人は越前大野の城主松平若狹守へ御預けと成りて

家を失ふ、此騷動勅方疎略にて手代任に御預け地差引せし故也と云々、

一上中關上 古高五百七拾壹石七斗六升壹合壹勺

前原町に陣屋を建、先年御味方に屬し落去せし林喜左衛門子被召出、宮崎筑後守には孫もおせん姫跡

目と被仰出、慶長六年々領之、一書に和泉守孫市岡庄右衛門繼之といへり、

古高貳百六拾五石

市岡和泉

新改高三百卅七石

同 利右衛門 初八郎左衛門入道而竹信



○藏原本云  
寛文中江州にて  
九万八千石同利右  
工四代官領御預り  
江州黒田郡云々

同 利右衛門

寛文中江州に而九万八千石之御代官所を預り、江州黒田郡本郷の古城跡に陣屋を構へ引移る、此跡  
所は手代西尾義左衛門を差置飯代官を勤しが、天和二戌年依讒者之謂不行跡之名立没收三宅嶋へ遠  
島、此後御料所今田領へ御付御預り、享保九年万年三左衛門御預りと成、同拾年飯島御預り。

一下中關 天正之比林紀伊守領之慶長之初逆心仍露顯御改易、此跡宮崎氏へ被下、慶長年中宮崎

筑後守忠政之五男へ分知。

宮崎備前守從五位下藤原忠次

初藤右衛門、子藤右衛門は八百石也

同 四郎左衛門

同 織部重政公

同 隼

人 養子也

同 新 七同

右下中關領合て三千五百石餘 段々立身也

内 三千石は下總國に而領之

内

下中關 古高貳百六拾五石七斗六升七合

新改高三百石と成る

○藏原本及北原本  
宮崎筑後守五男分  
知初藤右衛門子藤  
右衛門八百石なり  
宮崎備前守(イ從  
五位)忠政高三千  
五百石餘内三千石  
下總にて度々加増  
同四郎右(イ左)衛  
門 同織部重政  
同隼人養子 同新  
七養子  
右下中關領合て三  
千五百餘石云々  
(後藤本には全織  
部全四郎左衛門と  
あり)

福與部奈 高三百三拾五石

内 枝 村 峠

峠は古來無高にて金貳兩六兩迄上納、

此外關東に御加増地有

合三千五百石餘也

イ享保年中千葉新七  
享保元年申年イ暮新七郎仍亂氣自殺無一子失家子時廿七歲也。

一向 關 駒場川南に有りて古來駒場領也。 民家八拾軒有、

古高下貳百九拾五石五斗七升

慶長年中宮崎筑後守忠政領之、嫡子半兵衛に讓之。

高千石 宮崎 半兵衛

寛 文 年 中 同 高三百廿五石 同 半左衛門

同 清 三郎

同 清 太夫

不行跡に仍りて領知召上られ伯父宮崎助太夫へ御預となる、仍之家名をうしなふ、此跡御料所。

一大野 上 古高百貳拾石



古來駒場領、今は御料所、  
イ今は御料所

一 晝 神上 イ高 古高五拾九石壹斗九升六合三勺

大野に同じ

一小野川上 イ九 高九拾五石七斗三升八合

大澤邑共に家數合百軒

此所波合御關所之横道故番所相建阿島知久氏御預り、イ地方共に地高共に初は御預り、イ近年飯島領也近年地高は飯島御預り也。  
イ關 小野川より其原を越美濃落合へ五里有、イ往古之伊那街道の跡也往昔の伊奈大海道之跡也といふ。右之内野熊山附六ヶ村御  
イ中關上下下條の内備中原神子平 榑木成、上中關、向關、小野川、晝神并下條之内備中原、イ王子神樂也大鹿倉也。

一 園 原 高三拾四石六斗六升四合 是は小野川の内

納高四石貳斗六升四合 免壹ツ貳分三厘

一 立 石上 イ廿七石 古高五百拾五石八斗五升貳合四勺 イ二合五勺

往昔清和源氏之庶流甲賀三郎住之、元和四年近藤織部重堯領分構陣屋、イ知行所同子重信相續、イ總部重信公山本村へ陣屋を引と云々。

右三十三ヶ村下郷伊賀良之庄と云々。

○萩原本により左の五項を補ふ

一 松岡右衛門家臣 坂卷因幡、ニ羽生筑後三座光寺次郎助定者山吹氏祖也。知久大和守頼氏舊臣知久右馬介、虎岩玄蕃、堀小兵衛小林氏也別家也、知久伊左衛門則通、慶長比家臣白子平右衛門、前島六右衛門也。

一下條伊豆守法名 前豆州太守龍岳源蒼禪定門

家臣下條九兵衛、熊谷玄蕃、佐々木氏等也、小笠原掃部太夫

一大草村出生高坂彈正、享祿年中甲府に在住、永祿年中川中島に越後之押として被差置三千五百騎大將也、息源五郎も甲州に住、内藤も同村出生に而甲州に住、高坂は博學成武之士也。

一 上黒田村八幡宮黒印、慶長六年丑五月伊奈郡中朝日壽永御廻之時、當村水煎杵柄善治郎、小夫作右衛門を召連駒場清坂の八幡前に而申上社領貳石被下置黒印有之、右八幡領は小夫作右衛門田地から出る、右朝日壽永殿慶長八年卯七月廿八日高野山に參詣、千壽院谷成徳院に而逆修自身建法名永心法壽信士俗名丹波守壽永、寛永十六年卯十二月廿四日死、高野山に有。

飯田町年寄小笠原掃部太夫代

慶長年中黒木屋森四郎三郎、矢澤長九郎  
明暦貳年矢澤氏御免尾州名古屋に引越、二男矢澤佐助は知久氏へ侍分に被召出、森四郎三郎方へは脇坂安吉寛文五巳年御越有之、御土産黄金壹枚、米三拾石、古高麗茶碗、すしの茶碗二種熨斗御着拜領四郎三郎妻駕御免。

○校訂者曰  
異本多くは關原の  
條なし



同八年甲又御越、御土産黄金壹枚、米三拾石、眞綿貳拾把拜領、寛文拾貳年子七月御所替、其跡堀氏延寶八年迄年寄相勤、御免に而天和元歲に森四郎三郎山村に引越、明曆年中山村氏の町年寄被仰付脇坂代也、寛文歲中福住氏町年寄被仰付也。

一文祿貳巳年京極修理太夫代當城普請有之候處、今の峯高寺不明御門之内に慶林と申寺、往古坂西代有之候を普請に付引、其後城主小笠原兵部太夫代峯高寺と号此時住持、谷和尙也。慶長十二年兵部太輔秀政御内室岡崎三郎公御息女也、當城に而御逝去、當寺に御入依之爲御靈屋寺号を峯高寺と号、寺領は貳石壹斗貳升面、領地門前町と有之候得其門前町に而無之、慶長六五月朔日、壽永之黒印有之、京極修理殿城惣堀城内御普請之所、右慶林寺之和尙被申候、將軍秀忠公若狹守に今度は姫君御入與に付三河大乘寺流之淨土宗に候間秀政の普請可被申付旨光増右衛門被申附、今之所に寺地引移申候也。

信州伊奈郡鄉村記 卷之四終

宮崎氏畧系 (川手本註記)

